

日本の英語教育が直面する問題点の検討
—『すばらしい新世界』における教育的要素の分析を参考に—

210072 一 優真

序章

近年の国際化の流れを受け、日本における英語運用能力の需要は高まる一方であり、これに伴い日本国内の英語教育も変容してきている。小学校の学習指導要領と中学校の学習指導要領がそれぞれ 2017 年に新しく告示され、2018 年には高等学校学習指導要領が改訂された。小学校では外国語活動の開始が第三学年と第四学年に繰り上げられ、第五学年と第六学年ではそれまでの外国語活動に代わり、教科の一つとして外国語科が実施されることになった。中学校では教育課程上の変更はないものの、「授業は英語で行うことを基本とする」（文部科学省, 2017b, p.9）という、授業運営に大きな影響を与える規定が追加された。高等学校では科目編成に大きな変化が現れており、それまで「コミュニケーション英語」として存在していた科目が、「英語コミュニケーション」、「論理・表現」の二科目へと細分化された。

以上の改訂が行われた後、2023 年に文部科学省によって英語教育実施状況調査がなされたが、その「概要」（文部科学省, 2024）からは学習指導要領改訂前の 2013 年と比較した中学校、高等学校における英語力の推移を確認することができる。文部科学省（2024）によると、外国語運用能力の国際基準である CEFR における A1 レベル相当以上を達成した中学生の割合は 2013 年の 32.2%から 50.0%へ増加、また A2 レベル相当以上を達成した高校生の割合は 31.0%から 50.6%へ増加した。いずれも約 20%の増加が認められ、文部科学省（2024）は中学生、高校生の英語力について「着実に向上している」と評している。

一方で、文部科学省（2024）はまた高等学校における英語力について、2023 年に CEFR における B1 レベル相当以上を達成した生徒の割合は前年の 2022 年の 21.2%から 19.8%へ減少したと報告している。加えて、都道府県及び政令指定都市別の中学生、高校生それぞれの英語力については、「依然として自治体間の差が見られ、改善に向けて取り組む必要」（文部科学省, 2024）があると指摘している。以上二つの報告を鑑みると、未だ今日の日本の英語教育は、生徒にとって適切かつ十分なものであるとはいえないであろう。このような問題点を多角的な英語教育の現状の分析によって認識することは、今後の日本の英語教育の質を改善し、生徒のグローバル性の養成や進路の多様化を促進する一助となりうる点で意義のあることであると考えられる。

したがって本稿では、現代の英語教育の改善を主題とする。また、日本の英語教育の現状をイギリスの作家オルダス・ハクスリー（Aldous Huxley, 1894-1963）の小説『すばらしい新世界』（ハクスリー, 1932）に登場する教育学的な要素と比較し、英語教育の問題点を提示することを目的とする。研究方法は、政府の刊行物や先行研究を用いた日本の英語教育の

吟味と、『すばらしい新世界』の教育的観点からの分析、またこれら二つの分析結果の比較検討である。

『すばらしい新世界』は望ましくない社会体制やいき過ぎた人間統制が描かれたディストピア作品の一つに位置付けられており、録音再生を用いた子どもへの睡眠教育や電気ショックを用いた教訓の刷り込みをはじめ、作品内には教育に関連する取り組みや制度が確認できる。ディストピア作品と称されている以上、『すばらしい新世界』に描かれたこれらの要素は現実世界の視点からは「望ましくないもの」と認識されるのが一般的であると思われる。しかし、あえて現実世界である日本の英語教育と比較することで、新たな観点からの問題点の提案が可能であると思われる。

第1章では、現代の日本における中学校英語教育の現状を政府の刊行物等から確認するとともに、現状に対してすでに取り上げられている、あるいは検討されている指導アプローチがどのような要素を重要視しているかを先行研究から分析することで、すでに着目されていると思われる問題点を探る。

第2章では、『すばらしい新世界』のなかで、睡眠教育や電気ショックといった教育的な取り組みがどのように描かれているのかを分析し、作中の社会の教育理念を明らかにするとともに、「個性の抑圧」、「言語を用いた統制」の二点に焦点を絞り、これらの制度の作中での教育的な影響を考察する。

第3章では、第1章、第2章にて分析した現実世界である日本における英語教育と、『すばらしい新世界』内で描かれている教育的取り組みや教育に影響する諸制度とを照らし合わせ、類似点や相違点を明らかにしながら、日本の英語教育が孕んでいると思われる問題点を提示する。また、第1章で論じた問題点についても、本作品の分析内容を踏まえて再検討する。

第1章 現代日本における英語教育

本稿では中学校における英語教育と『すばらしい新世界』における教育的要素を比較するが、本章では日本の英語教育の現状を確認する。はじめに、中学校の英語教育における教育制度、教育課程、指導方法を公的機関の資料や諸研究者の言及を踏まえて分析する。次に、現状の英語教育における個別最適な学びと教科書の使用について分析し、現状どのような部分が問題点としてみなされているのかを検討する。

第1節 中学校における英語教育の現状

本節では中学校における現状の英語教育について確認するため、特に教育理念やカリキュラムの観点から、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編』（以下、『中学校学習指導要領』）の記載内容をもとに分析を行う。また、分析した教育理念やカリキュラムの効果性について論じる。

文部科学省は2017年3月に中学校の学習指導要領の告示と改訂を行ったが、2019年度から2020年度を移行期間として、2021年度から改訂された内容の全面的な実施を行うこととした。カリキュラムについては一単位時間を50分として第一学年から第三学年までそれぞれ140単位時間を外国語科に割くこととしており、指導内容としては「外国語科においては、英語を履修させることを原則とすること」（文部科学省, 2019）と明記している。酒井ら（2022）は、「原則」という文言に対して、学校や地域、生徒の実態に応じて英語以外の外国語の学習が可能であると論じているが、ほとんどの場合は英語が採用されている。文部科学省による英語以外の外国語科目を設けている中学校についての調査は直近では確認できなかった。高等学校の事例を参考にあげると、文部科学省による調査「令和3年度高等学校等における国際交流等の状況について」（文部科学省, 2021）によれば、2021年度時点で1190校中607校であることが確認でき、前回調査の2018年度と比較すると70校減少している。教科名が「外国語科」と設定されている一方、英語以外の外国語の採択が減少している現状からは、英語需要の益々の拡大とともに、「外国語＝英語」というステレオタイプの広まりが考えられる。

生徒が英語を用いて理解、表現しコミュニケーションを図るための資質、能力の一つとして、『中学校学習指導要領』（文部科学省, 2017b）には外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解が定められている。酒井ら（2022）はこの中の「文法」の表記について、小学校外国語科との接続の観点から留意点を示している。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』（以下、『小学校学習指導要領』）では、文法知識の習得に主眼は置かれずと示されており、指導する、理解させる内容が文法ではなく文構造である点において、『中学校学習指導要領』との差が見られる（文部科学省, 2017a）。酒井ら（2022）はこの文構造について、基本的な表現をある程度のかたまりのように捉えたものとしており、「文法」については文構造が細分化された文中の主語や動詞までが含まれる

ため、中学校ではこれらを認識、理解することを目指すと論じている。教育学者の渡慶次（2023）は小学校と中学校の英語学習内容における文法的特徴の連携を教材と授業観察を通して研究している。渡慶次は、小学校では身近な話題や使用目的をもとに学習表現や文法を提示している一方、中学校では文型や用法の複雑さや困難さをもとに学習する文法項目を配置しているため、同じ「英語指導」の中でも文法的特徴に違いがあると主張している。2017年の小学校の学習指導要領改訂により小学校における外国語活動、外国語科のさらなる重点化が測られたことで、一層英語教育における小学校教育との連携が注目されている。酒井ら、渡慶次の論はいずれも小学校と中学校の英語学習内容にそれぞれの特徴、違いがあることを示唆しているが、子どもたちが対応し切ることができ、学習に効果的なステップであるか否かの検討が必要であると思われる。中学校への進学は子どもたちにとって大きな負担であるがために、このタイミングで学習内容が大きく変わってしまうことで授業についていけず、ステップアップのための段階がかえって生徒の学習意欲を低下させてしまうことになりかねないという懸念がある。

『中学校学習指導要領』によると、「知識及び技能」に加え、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の二者が教科に関わらず中学校における学習の三つの柱として設けられている（文部科学省, 2017b）。他者との対話に必要な「言語」を学ぶ外国語科の授業では、これら二つの資質の養成が顕著に求められると考えられる。教育学者の加賀田（2009）は日本での人間学的英語教育の実施を提案する中で、教育理念や目標については、国際的視点、他者理解、指導中の留意点として生徒の自己開示や自分自身への気づきといった情意的な面を評価し養成するなど、英語教育の人間主義的なあり方への変容を主張している。確かにコミュニケーション活動を通して、より他生徒と関わる機会の多い外国語科では、他者との交流の中で生じる自己成長もより多く見込めるであろう。しかし加賀田も指摘しているように、英語を EFL (English as a Foreign Language) と捉える日本の英語教育において、受験英語としての英語学習のあり方を否定、回避することは難しい。さらに、英語の授業の中で、あるいは英語で思考するときに、ある程度の英語に関する知識、技能が前提として求められることは、日本語を母語とする日本人にとっては当然のようにも思われる。「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の二者以上に、「知識及び技能」は英語教育において今後も密接な関係を維持すると考えられる。

本節では、現状の英語教育について確認するために、主に「外国語科」の名称、小学校との文法的接続、情意面の養成といった点から分析した。外国語科の名称については、「外国語＝英語」という偏見を生じさせかねないこと、文法的接続については、小学校英語と中学校英語の間の差が生徒に好影響を与えるものか検討する必要があることについて論じた。また、情意面の養成については、他者との交流活動が多く行われる外国語科がより効果的な教科であると論じたが、一方で受験英語の必要性を考慮すると、英語に関する知識や技能の習得は情意面の養成以上に重要視され続けるであろうと指摘した。

第2節 個別最適な学びの奨励

本節では日本の教育において奨励されている「個別最適な学び」が英語教育にどのように影響を与えているのかを諸研究者の教育実践や主張をもとに考察する。そして、個別最適な学びの達成に関する問題点を明らかにするために、果たしてそれが文部科学省の目指す形で英語教育に反映されているのかどうかを検討する。

中央教育審議会は2021年1月、答申において、『『個に応じた指導』を学習者視点から整理した概念である『個別最適な学び』』（p.2）の充実化を目指していると示した。また、個別最適な学びを「指導の個別化」と「学習の個性化」の二つに整理している。指導の個別化については、基礎的な知識・技能を習得し、思考力・判断力・表現力等や粘り強い学習への姿勢を育成する上で必要とされる、必要性に応じた教師から生徒への重点的な指導や、一人ひとりの特性・進度・習熟度に応じた指導方法や教材、学習時間の柔軟な提供といった説明がされている。学習の個性化については、1) 習得した基礎的な知識や能力を土台にした学習が子どもにとって最適化されるよう施される、2) 子どもたち自身の興味・関心やキャリア志向に応じた学習活動や学習課題といった機会が提供されると説明がされている。これらの記載内容から現在の日本の教育においては、以前までの画一的な詰め込み型の教育を脱し、子どもたちの個性や個人差といった「個」に応じた指導、教育を提供することで、いわゆる落ちこぼれ生徒の発生の防止に取り組んでいることが伺える。

以上の個別最適な学びの方針は、英語科においてはどのように考慮されているだろうか。『中学校学習指導要領』には、「教室には様々な個性や特性のある生徒がいるため、それを把握した上で、指導に効果的と考えられる学習形態を柔軟に選択していくことが求められる」（文部科学省, 2017b, p.95）と記載されているが、義務教育学校教員の嵐谷ら（2022）はこの方針に基づいた、特に「学習の個性化」についての具体的な英語教育実践を行っている。嵐谷らは中学校において、生徒が「どのように学ぶか」の視点に立ち、教師から生徒への積極的な支援の提供ではなく、生徒が必要に応じて自ら選択し、使用するための「足場の支援」を実践した。具体的には、リスニングの際に使用できるヒントカードやホワイトボード等の教材を備える、ライティングや問題集の並べ替え問題に使用できる iPad を備える、個人で考える時間に、「1人で・ペアで・教員やALTと」など環境の選択肢を用意するといった支援のオプションを整えている。「指導に効果的と考えられる学習形態を柔軟に選択」（文部科学省, 2017b, p.95）の観点からは、生徒が自己判断に基づいて学習を組み立てることができる点で、非常に柔軟性を持った実践例であるといえよう。さらに、生徒のオプションの使用状況から生徒の個性、特性を分析、把握することが可能と思われ、オプションへのフィードバックによる一層の選択肢の充実が期待できる。しかしながら、生徒の興味・関心には配慮が届いているように思われるが、「キャリア志向」について直接的な影響があるとは言い難い。先に挙げた個人活動時の環境の選択肢が、生徒それぞれがいかに協働するのか、または個人での活動を好むのかといったスタイルに影響を及ぼしうるとも考えられるが、

生徒たちのキャリア形成そのものにまでは及ばず、あくまで間接的な影響に留まるだろう。

嵐谷ら（2022）は生徒の個性、個人差に基づいた学習方略の自律的な決定というテーマを扱っているが、教育学者の杉山（1998）は文部科学省の示す「生きる力」の理念に基づき、嵐谷らとは異なる観点から「個性化」教育の必要性を主張している。生きる力とは、日本の学校教育が長年育成を目指してきたものであり、三つの柱「何を理解しているか、何ができるか」、「理解していること・できることをどう使うか」、「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」（文部科学省, 2017b, p.3）に基づくとされている。杉山はこの生きる力について、生活の中で形成されるものであるとしている。また彼は、操作的で没個性的な学習そのものを否定はしていないが、「学習」の範疇を超えずに埋没してしまうこと、生活との関連付けが行われないことに対し、問題であると主張している。今日子どもたちの学習内容の膨大化はますます進んでおり、遊び、生活といった要素に入る余地が与えられない状態が続いているが、このように「学ぶ場所」としての学校が成長してしまうと、一見学びが充実されているように思われても実態として子どもたちによる学びと生活との結びつけや人間的成長が達成されず、形骸化した学びが残ってしまうことが危惧される。杉山の研究テーマは、学習と子どもの生活や人生、加えて学習やその応用を通した子どもたちの人間的成長という観点が含まれており、キャリア形成に通じる部分があるといえるだろう。したがって嵐谷らの足場的支援との位置関係として、相補的に学習の個性化の要素を補い合っているといえる。

本節では、個別最適な学びの、特に学習の個性化の観点から、『中学校学習指導要領』に記載された教育理念や、足場的支援、生きる力に関する研究を参照し、個別最適な学びに関する問題点について論じてきた。子どもたちの興味や関心といった個人差に応じた学習方略の提案等、授業内での取り組みが充実してきている反面、一人一人のキャリア形成、人間形成に応じた指導のあり方については未だ改善の余地があると思われる。結果として、個別最適な学びについては未だ政府の目指す形での実施にまでは至っていないといえるであろう。杉山（1998）の主張する、いかに生活と学習とを結びつけてゆくかに加え、学校における「余裕」をもたらすことは、「学ぶ場所」に固執しない学校づくりに必要な方針ではないかと考えられる。

第3節 教科書の使用

本節では、今日の教科書使用に関する現状に示唆される、生徒の教科書から受け取る情報の制限とそれに伴う悪影響について論じる。そのために、『中学校学習指導要領』や研究者の言及をもとに、日本の中学校英語教育における教科書使用の現状を確認する。

まず、教科用図書検定の主体である文部科学省の教科書の使用に対する認識を『中学校学習指導要領』から確認する。『中学校学習指導要領』には「教科書」という単語が合計七回登場するが、教科書の使用、活用方法についての文脈の中で記されているのはそのうちの二

回である。一回目は授業内容について、特に「書くこと」についての活動として、社会的な話題に対して自らの気持ちや理由を記述する活動が勧められている中で、「(前略)教科書に取り上げられている話題に関する自分の意見や感想などを、(中略)投稿文の形式で書いたり、ディベートの立論形式に則って書いたりすることが考えられる」(文部科学省, 2017b, p.69)と記されている。二回目は指導計画作成上の配慮事項に関する記述の中で、生徒の理解度に応じたクラスルーム・イングリッシュの使用について、「既習の言語材料を用いながら教科書の内容を説明したり生徒とのやり取りを行ったりすることで、教師の使用する英語は生徒にとって効果的なインプットとなる」(文部科学省, 2017b, p.86)と記されている。その他五回の「教科書」という単語の登場については、教材としての改善点や使用されている語彙・文法に関する文脈の中で使用されている。教科書の使用に関する記述が二回のみであることから、文部科学省は教科書の使用について、拘束力のある基準等は設けていないと理解できる。それに伴い、生徒が教科書に記載されている内容から何を学び、どのように感じるかについては、生徒の主体性が尊重されるとはいえ、大まかには教員の指導に委ねられているように見受けられる。

次に、中学校外国語科の教科書における文法的事項の現状を確認する。渡慶次(2023)は、小学校と中学校の文法指導の接続についての研究の中で、六社の中学校第一学年用の教科書を分析している。彼は六社の教科書の共通点として、2006年版の教科書から渡慶次が研究を行った2022年当時の採用教科書まで、記載文法に「学年枠」が設けられており、文法事項の配列順序はその学年枠の中でのみ移動していることを挙げている。続けて彼は、一般に習得が困難な現在完了形や仮定法、不定詞、関係代名詞といった文法事項が第二・三学年の上位学年に固定的に配置されていると分析している。2006年から渡慶次の研究が行われた2022年までの間には複数回の学習指導要領改訂が行われたにもかかわらず、第一・二・三学年で習う文法事項は教科書において、その学年枠を超えることがなかったのである。この理由として教育学者の馬場(2009)は、1) 1977年版の学習指導要領にて示された、教科書における「言語材料」の汎用性の高さ、2) 教科書製作者や英語教員への、1977年に示された「言語材料」の浸透、3) 改訂版教科書導入に際する煩わしさの回避の三点を挙げている。言語材料とは、1958年度版学習指導要領から1977年度版学習指導要領まで文部科学省が示した、外国語の授業内で用いるべき音声や文字、単語、表現等の概要である。馬場は2)の教科書製作者や英語教員への「言語材料」の概念の浸透が学年枠に最も影響を与えていると論じているが、渡慶次が教科書の分析を行った2021年版の教科書の学年枠にまで「言語材料」の影響が浸透しているとすれば、学年枠自体が前時代的な影響を受けた修正すべき問題点であるといえよう。しかしながら学年枠は公的機関によって公表されているものではなく、あくまで渡慶次や馬場といった研究者の教科書分析に依るものであることは留意する必要がある。

以上、中学校英語教育における教科書の使用と、教科書における文法的事項の記載の現状

について確認してきたが、最後に生徒の教科書から受け取る情報の制限とその悪影響について論じる。『中学校学習指導要領』によると、文部科学省は教科書使用についての具体的なレギュレーションを設けておらず、これに伴って生徒が教科書を読んでどのように感じるかは、大方教員に委ねられうると先に論じた。言い方を改めると、教員の介入を前提として作成された教科書を読んだ生徒は、教科書上の限られた記載内容と個人の限られた知識や経験をもとに誤った解釈を行う可能性が示唆される。三省堂から出版されている教科書『NEW CROWN』シリーズは、東京都中央区をはじめ広く採択されている中学校外国語科の検定教科書の一つである。第三学年用の『NEW CROWN Series 3』には、学習の題材となるテキストとして、広島で原子爆弾の被害にあった佐々木禎子さんのエピソードをはじめ、広島原爆投下に関連するテキストを扱うセクションが存在する。また、『NEW CROWN』シリーズのみならず、外国語科の教科書には広く広島原爆投下に関連するテキストが用いられているようである。我々日本人が戦争に関するテキストを読むとき、一般には敗戦国日本の国民の一人として、悲惨な国際戦争であったことを学び、今後の平和を祈るであろう。しかし、日本における終戦日である 8 月 15 日は、連合国側であったイギリスやフランス、アメリカ等では戦勝日として認識されている。さらに韓国では日本の植民地支配からの解放記念日、朝鮮半島の分断が行われた日、そして大韓民国の建国記念日として認識されているなど、一つの国際戦争に対しての考え方は国家間で異なる。『中学校学習指導要領』は外国語科の授業において題材に求められる観点として国際理解の深化に役立つことを挙げているが、他国の人々の考え方や国際的事象への解釈を認識することも国際理解の一つといえよう。しかしながら、『NEW CROWN』をはじめとする教科書は以上のような国際理解の観点を満たした教科書とは言い難い。被曝や敗戦といった歴史的事実を受け止め、日本人のアイデンティティを育む意図としては評価できるテキストといえるが、「外国語」である英語を学び国際性を育む上で、第二次世界大戦という巨大な国際戦争を日本人の目線のみから捉えている現状からは、英語教育における国際理解を促す内容に偏り、制限がかかっているといえるだろう。

制限がかかっていると思われる記載内容は国際理解的な内容のみではなく、先に示した学年枠による学年ごとの学習文法が挙げられる。端的な例を挙げると、第三学年で扱う文法は第一・二学年では登場せず、第二学年で扱う文法は第三学年には登場するものの第一学年には登場しないといった明記のないルールである。改訂版教科書への移行が容易である等、教員にとって都合の良いものである一方、特に第一・二学年については、習得済みの比較的単純な文法でしか自己表現ができない、つまり、学年枠は生徒目線の文法の必要性を度外視してしまっていると考えられる。渡慶次（2023）は、このような中学校の現状とは対照的に、小学校外国語科の教科書では、身近な話題やコミュニケーションの目的に応じた表現・文法の提示がされていると分析している。中学校でもコミュニケーションでの必要性に応じた文法の提示をするとすれば、単に第一学年から習得が容易な順に文法を並べるのでは

なく、会話上でよく用いられると思われる過去形、現在進行形、現在完了形等といった時制についての事項をまとめて記載するという方法が挙げても良いかもしれない。

本節では、日本の中学校英語教育における教科書使用の現状を、『中学校学習指導要領』や研究者の言及をもとに確認し、生徒の教科書から受け取る情報の制限とそれに伴う悪影響について論じた。具体的には、国際事件について局所的な観点からの記載に限定されていることに起因する生徒が受け取る情報の制限や、学年枠による生徒の使用文法の制限について理解した。さらにこれに伴い、国際理解の欠如や必要性に基づかない非効率的な文法学習といった悪影響があった。生徒が教科書に受け取りを制限されている情報として、国際理解に関する多角的な視点とコミュニケーションにおける必要性に応じた文法事項の二つについて論じたが、いずれにおいても生徒の国際社会での活躍を見越し、生徒目線で改善していくべきであろう。

本章では、『すばらしい新世界』における教育的要素との比較の前提となる中学校の英語教育における教育制度や指導法、教科書について確認した。またそれらの現状や実践されているアプローチの分析から、今日どのような問題点が生じているのかを論じてきた。小学校と中学校それぞれの英語指導における文法的特徴の差と英語教育による生徒の情意面の養成や一人一人のキャリア形成、人間形成に応じた指導のあり方、そして国際理解についての多角的な見方と学年枠による提示文法の制限を、問題点として示した。

第2章 教育的視点による『すばらしい新世界』の分析

前章では、日本の中学校英語教育についての概要の確認、並びに今日の現状と実践されているアプローチから推察される、教育上の問題点について論じた。本章では、前章で論じた日本の英語教育との比較材料を得るために、教育的視点から『すばらしい新世界』の分析を行い、作中で描かれている教育アプローチや社会制度に込められた教育的な意図を明らかにする。はじめに、睡眠教育や電気ショックを用いた思想の刷り込みといった教育アプローチについて分析する。次に、人間の工場生産や階級制度から生じる個性の抑圧が作中の人々に与えていると思われる教育的な影響について論じる。最後に、幼児期から続く言語を用いた統制が登場人物たちに与えていると思われる影響について考察する。

第1節 作品内における教育の描かれ方

本節では、『すばらしい新世界』においてどのような教育方法が描かれているのかを分析することで、作中の普遍的な教育理念を明らかにしたい。そこで、作中の代表的な教育的アプローチとして、睡眠教育（ヒプノペディア）とネオ・パヴロフ式条件反射教育（以下、条件反射教育）を取り上げ分析する。

まず、作中で登場する睡眠教育について、語り手による説明や登場人物の発言をもとに分析する。物語に登場する人間生産のための工場、孵化・条件づけセンター（以下、センター）の共同寝室には、整列したベッドに赤ん坊が一人一人寝かせられている。そして、赤ん坊たちが寝る枕の下からは、「デルタの子はみんなカーキ色の服を着ている。ああ、いやだ、デルタの子たちとは遊びたくない。エプシロンなんてもっとひどい。ものすごく頭が悪くて読み書きもできない。おまけに服の色は黒で、ほんとに嫌な色だ。わたしはベータでほんとうによかった」（pp.31-32）という階級意識に関する放送、さらには性愛に関する録音音声流される。幼児たちの一度の睡眠で録音は40から50回流し続けられ、これが30ヶ月間続けられる。このような幼児期からの道徳規範の刷り込みを考慮すると、作中で人々がディストピア的な制度や常識に疑うことなく従うことも腑に落ちる。

作中では、睡眠教育は当初、知的教育の手段として運用されたとされているが、これは「不適切な路線」（p.29）であったとセンターの所長は説明している。語り手も、「わけもわからず憶えこんでも何かを学んだとは言えない」（p.30）と加えている。そこから睡眠教育は道徳教育に転用され始めるが、その理由としては、「道徳教育はいかなる場合でも理屈抜き」（p.30）であるからと説明されている。なぜそうなのか、証拠は何であるかという理屈が伴う知的教育を行う上で、一方向的かつ絶対的な指導である睡眠教育は不適切であったのである。一方、道徳教育の指導としては、「大ざっぱ」（p.32）な条件付けを行う条件反射教育では植え付けることのできない道徳規範の細かいニュアンスや複雑な行動規範を、「理屈抜きの言葉」（p.32）として刷り込ませることができるとして適しており、運用に至ることができた。語り手は、幼児期に刷り込まれた指導は大人になってからも、判断、欲求、決意に

影響すると述べており、これは小さな頃の学習能力の高さや聴覚的情報の重要性を逆手にとり、世界国家の意のままに人々を育てようという管理主義的な教育理念が反映されているといえよう。

次に条件反射教育に関して、睡眠教育と同様に語り手や登場人物による言及をもとに分析する。条件反射教育のための部屋には花が詰められた水盤と絵本が並べられ、そこに赤ん坊たちが連れて来られる。花と本が見えるように向きを変えられた赤ん坊たちは興味を惹かれ、花びらや紙のページを触り始めるが、保育士がレバーを下げるとサイレンと警報ベルが音を鳴らし始め、赤ん坊たちもつられて悲鳴を上げ始める。さらに保育士が別のレバーを下げると、赤ん坊たちのいる床から弱い電気ショックが流れ始め、彼らの泣き声は狂気を帯び出す。そしてサイレンと警報ベルが止み、電気ショックも止まった後、赤ん坊たちに花と本を与えると、それまでとは一変し、一層大きな声で泣きながら怯え出すのである。先に指摘したように条件反射教育は粗い指導方法ではあるものの、書物と騒音、自然と電気ショックといった危険な連想を強烈に植え付け、書物と自然に対して激しい嫌悪感を抱かせる。

語り手は、「二〇〇回くり返せば、もう連想は解けない」(p.25)と説明しているが、生後一年も経たない赤ん坊たちに対し、どれだけ弱いとはいえ電気ショックというフィジカルかつ危険なアプローチを取ろうとする姿勢からは、子どもが守られるべき、尊い存在であるといった意識は伺えない。条件反射教育には、子どもたちを統制された社会の歯車の一つとするべく、画一的な在るべき姿に形成しようという意識が表れていると考えられ、睡眠教育と共通して教育を施す側の存在である世界国家が統制的に指導するディストピア的な教育理念が隠されているといえよう。

そもそも条件反射教育は、書籍と自然に対する本能的な嫌悪を植え付けるために行われているものであるが、この段落では特に自然に対する嫌悪に焦点を当てる。自然に関する条件反射教育のねらいは、子どもたちに無料で楽しむことのできる花や景観といった自然生成物への嫌悪感情を抱かせ、高度な器具を用いる有料の娯楽を好ませることによって、工場製品の消費を促進し経済を循環させることにある。さらにそれらの娯楽は、田園地帯で行われるため、人々は交通機関を大いに利用し、この点でもまた経済が円滑に回るメカニズムとなっている。経済学者の **Kuang (2022)** は作中において経済が重要な支線となっていると主張している。続けて彼女は、経済的意識に関して、直すことよりも新しいものに買い換える考え方が世界政府によって奨励されていることが、人々の生産性と社会的な経済効率を上昇させていると論じている。「労働者に過剰な余暇を与えるのは残酷なこと」(p.249)であるとされている作中の社会では、確かに **Kuang** の主張する過度な購買意欲がかえって安定した労働を実現しているといえよう。商品の購入や運賃の支払いといった消費行動は、人間の生活とは切り離すことができない関係にある。その消費行動すらも、人間の嫌悪感情と結びつけて操作しようとする世界国家による教育は、一方では非常に生活と緊密な教育といえるかもしれないが、一方ではいきすぎた教育による人間統制とも捉えられ、やはり後者の

人間統制の観点からディストピア的であるという評価が適切であろう。

教育と生活との過度な緊密性については、睡眠教育についても同様の特徴が認められると考えられる。睡眠教育で放送される講義の中に性愛に関する内容があると先に説明した。誰を好き、誰を愛するかを含む人間関係はその人の生活を、強いては人生を形成する重要なファクターである。その性愛に関して、第三者が理屈抜きの言葉で規範を教え込むということは、当人の生き方を限定してしまうことに他ならない。このことから、作中における教育は、生活はおろか一生涯にわたって人々に管理主義的な制限を与える点でディストピア的であるといえる。

本節では、作中に登場する代表的な教育方法として睡眠教育と条件反射教育を取り上げ、それらを分析し、どのような普遍的な教育理念が敷かれているのかを明らかにしてきた。睡眠教育と条件反射教育には共通して、1) 世界国家の意のままに、人々を社会の歯車として画一的に育て上げる、2) 過度に人々の生活と緊密な関係を築き、一生涯にわたって影響を与え続ける、といった二つのディストピア的な教育理念が根付いていることが明らかになった。

第2節 個性の抑圧

本節では、『すばらしい新世界』にみられる人間の工場生産や徹底された階級制度が引き起こす個性の抑圧が、作中の人々に与える教育に関する影響について論じたい。その影響を明らかにするために、作中に登場する 1) 人間の工場生産、2) 階級制度についての描写や言及を取り上げ分析することとする。

まず、人間の工場生産について分析する。作中において人々は皆、センターで人工的に受精、培養され誕生する。培養する際には、ボカノフスキー法という手法を用いて一つの受精卵を最大 96 個に分裂させることで、最大 96 人の一卵性多胎児を一度に誕生させることが可能となっている。一つの受精卵から分裂していった一卵性多胎児のまともりはボカノフスキー・グループと呼ばれ、皆容姿がそっくりな上に行動様式も一様である。センターの所長が、「まったく同じ多胎児が、九十六台のまったく同じ機械を動かす！」(p.10) と述べており、別場面でも電気機器会社の人事部長によって「それぞれの工程は、できる限り単一のボカノフスキー・グループに属する作業員が担当します」(p.175) と説明がなされているように、ボカノフスキー法によって保証される市民間の同質性は、安定した社会の生産性を支えている。「共同性、同一性、安定性」(p.5) がモットーとされている世界国家において、個性を犠牲にしたボカノフスキー法による同一性の確保は、最も注目すべき要素の一つであるといえる。

では、作中において個性の抑圧はどのような影響を教育に与えていると考えられるだろうか。前節で説明した電気ショックを用いた条件反射教育に一度に参加する赤ん坊たちは、おそらく同一のボカノフスキー・グループであると語り手によって言及されている。そこで、

個性が排除された学習環境が条件反射教育に与える影響について考察する。赤ん坊は、自分の属するボカノフスキー・グループの赤ん坊たちの電気ショックに対する反応しか、目にすることができない。つまり、自分と異なる遺伝子をもつ赤ん坊の、同じ条件反射教育に対する反応を確認することができないのである。したがって、自分の反応を遺伝子の異なる赤ん坊と比べ、客観的に捉え、自分の抱いた自然や書籍への嫌悪感を疑う術が赤ん坊たちにはないといえる。

教育学者の太田（2016）は、本作品に登場する世界について、親に応じた差がないことで、人々の心に葛藤が生まれないと指摘している。この葛藤をはじめ、自分を他者と比較し客観的に比べることや、自分の考えを疑うといったことは、内省し自己成長を遂げるために不可欠な要素であると思われる。それらが教育の場において、ボカノフスキー法によって排除され、自己成長が阻害されていることこそが、人間の工場生産による個性の抑圧が人々に与えている教育的な影響であると考えられる。

次に、階級制度について分析する。作中の社会には、人々が上位からアルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、エプシロンの全五位に区分された階級が存在している。上位二階級と下位三階級の大きな差として、先に説明したボカノフスキー法によって分裂させられるか否かという違いがある。アルファ、ベータ階級の人々は一つの受精卵から一人が誕生し、支配階級として比較的丁寧に育成される。ガンマ、デルタ、エプシロン階級はボカノフスキー法の処置の過程で X 線を浴び、アルコールを投与されるなど、条件付けを受けながら育てられる。下位階級はその他にも、低酸素下に置かれ、高温環境の中に放置されるなど、人体の成長において悪質な操作を受けるが、これらは下位階級にとって不要とされている知能の獲得を妨げると同時に、労働時に身を置く劣悪な環境に身体を慣らすための条件付けなのである。その後は過酷な環境で労働に従事するが、彼らは前節で説明した睡眠教育によって自身が身を置く階級に否定的な意識を持たないよう条件付けされているため、たとえ最下位のエプシロン階級であっても、上位階級に憧れすら抱かずひたすら経済の安定のために働き続けることとなる。自らに充てられたタスクへの効率を最大化しているといえよう。

以上の階級制度の概要を踏まえ、ここからは階級制度が市民に与える教育的な影響について考察する。先に示した階級ごとの環境操作や自階級意識に関する睡眠教育に共通する理念として、安定が挙げられる。各人が自階級に誇りを持ちながら従事すべき労働に精を尽くす様子を切り取ると、保安的にも経済的にも安定した、望むべき社会体制であると評価される可能性もある。しかし、教育的な評価を行ったとき、この社会体制は人々の向上心を抑圧し、日常的な学びを妨げうる体制であると考えられる。作品内の階級制度においては、どれだけ労働したとしても上位の階級へ昇級することはあり得ない。もし昇級が許されているとすれば、市民たちはより良い地位や賃金を求めてより良い働き方を模索するはずであると思われる。このような上昇志向の中であれば、日常的にさらに多くの知能を得ようと、書籍等の情報媒体への意欲が増幅し、世界国家による過度な情報統制に抗おうという意識

が芽生えるのではないだろうか。しかし作中で描かれているのは、センター員のレーニナが「カーキ色ってほんとに嫌な色」(p.72) とデルタ階級を象徴する色を嫌っているように、下位階級を蔑む姿勢のみである。このように、個性を廃し人為的に分別された階級制度が人々にもたらしうる教育的な影響として、上昇志向の抑圧に端を発する、日常的な学びへの意欲の排除が挙げられるといえよう。

本節では、『すばらしい新世界』に登場する、個性の抑圧に関連する諸制度が人々に与える教育的な影響について、作中の描写や説明を中心に分析し論じてきた。結果、市民が被っている影響として、1) 個人の自己成長に不可欠な要素の排除、2) 上昇志向の抑圧に伴う日常における学習意欲の消失の二点を示した。自己成長と日常的な学習意欲のいずれについても、一般的には勧奨されるべきことであるため、この点、やはり教育的観点から評価するに、『すばらしい新世界』は望まれるべきでない社会を描いているとの評価が妥当であろう。

第3節 言語を用いた統制

本節では、生徒の教科書から受け取る情報の制限との関連性が推察される『すばらしい新世界』における言語を用いた統制を分析し、その教育的影響を明らかにすることで第1章第3節にて論じた日本の英語教育における教科書使用の現状と比較し問題性を検討するための比較材料を得たい。ここでは作中に見られる言語的統制の重要性と効果について論じた後に、ことわざと新聞紙の二点に着目し考察を行う。

まず、本作品における言語を用いた統制の重要性と効果について確認する。作中では、睡眠教育による録音放送や新聞といった媒体を通して、世界国家のイデオロギーが含まれた言葉が市民へと伝達される。そうしてディストピア的に社会化されるように市民たちを統制することによって、社会全体の共同性、同一性、安定性が保たれているのである。作家の Simpson (1993) は、会話など、社会的次元の中で扱われる言語というものには必然的にイデオロギーが反映され、また言語自体がイデオロギーを構築すると主張しており、また英語学者の Martín (2019) は Simpson の当発言を踏まえ、ハクスリーは自身の想像するディストピアを描写するにあたって、言語統制に頼っていると論じている。具体的には、Martín は言葉は人間が社会を形成し、運営する上で切り離せない要素であるが故に、社会とそこに住まう市民を統制する上で顕著に効果的で影響力のあるものであったとハクスリーの言語的統制に対する意図を推察している。日常における言葉、言語の影響力を鑑みれば、活字にせよ、音声にせよ、言葉がなくては他者との交流は在り得ない上に、情報の授受もままならないため、ハクスリーのディストピア描写における言語的統制への依存に関する Martín の主張は妥当であると判断できる。さらに、ハクスリー自身も「言葉は人生で大きな役割を果たすもの」(ハクスリー, 1986, p.99)、「言葉は、それを使う人の心に影響を及ぼす」(p.99) と論じており、これらの記述からは、彼がディストピア社会を描く際に意識的に言語的統制

を用いていることが示唆される。したがって、ハクスリーが言語に重要性を見出していることから推察するに、作中での言語を用いた統制は作品内において最も重要な要素の一つであると考えられる。

続けて、言語的統制がもたらす効果について論じる。英文学者の **Fu (2023)** は作中での言語統制の効果について、階級制度や消費価値に対する政治意識の統制と、他者との感情的なつながりと歴史的記憶の消去に基づく道徳的統制の二つを挙げている。この二つの効果を考慮すると、世界政府は、市民一人一人から、血縁や友情といった他者との関係性を剥奪し、過去に起こった思想へのアクセスをも閉ざすことで、作中における現在の社会から逸脱した思考や発想が生じることを防止していると解釈できる。市民を人とのつながりからも、過去と現在という時間的なつながりからも孤立させた上で、階級制度や消費行動といった社会性を植え付け、統制を行っていると見えるであろう。このように、**Fu** の主張する言語的統制の二つの効果は、どちらか一方では十分に作用しないものであると考えられる。

次に、言語的統制の中から『すばらしい新世界』に登場することわざに着目して分析を行う。作中では、「一立方センチのソーマは一〇人の憂鬱を癒す」(p.62) や、「継ぎはぎするより次々捨てよう」(p.56)、「縫い針一本恥のもと」(p.56) のようなフレーズが、本作品での合法ドラッグであるソーマの推奨や消費行動の規制のための言語統制として利用されている。このようなフレーズについて、**Martín (2019)** は *proverb* と表現しているため、本稿ではこれに準じてことわざと表す。ことわざが言語的統制に用いられた意図として、**Martín** はことわざの形成過程に着目して分析している。彼は、ことわざは人々の間で伝承されるものであり、どの社会集団に属しているかを示すサインであるため、社会的構成要素の一部であると考えたのである。同一の言語を話す地域の中でも、同じ表現や言い回しを用いる人々によって構成されたコミュニティでは、それを共通項と認識することで共同性が高まるものと思われる。

また、作中で登場することわざは英訳表記だと、実在する英語のことわざのパロディとなっているものがほとんどである。先に挙げた「一立方センチのソーマは一〇人の憂鬱を癒す」(p.62) は、原作では“A gramme in time saves nine” (Huxley, 1932, p.60) と表記されており、これは、“a stitch in time saves nine” という既存のことわざを一部修正したものとなっている。意味的にも繋がりが認められ、既存のことわざである後者は、今問題に取り掛かれればことが大きくなる前に沈めることができるということを表し、作中のことわざである前者は、字義通り、手軽にソーマを摂取してしまえば十人分の憂鬱を消し去ることができるという意味を持つ。**Martín** は、元のことわざから派生したことを想起させることで、作中の世界があくまで現実世界の延長線上の近未来であることを表すと主張している。言葉は時代を経て変容していくものであり、経過した時代の中に存在したイデオロギーを巻き込みながら、作品内の社会に適応した政治意識や道徳規範を反映することわざへと変化を遂げたと考えれば、**Martín** の考える現実世界との繋がりは十分に理解できるといえよう。

ここで、以上に示したことわざを用いた言語統制に関して教育的視点からの分析を行う。作中に登場する市民は、みな世界国家に属しているが、そこで共有されていることわざが睡眠教育等を通して強制的に刷り込まれていることが、人々が文字や音声で受け取る言語的情報全体を鵜呑みにしてしまうことの要因となっていると考えられる。その上、人々が批判的に物事を捉え、自分の意志や意見を確立する過程で培われる言語知識も、言語的統制に影響を受けたものである。そのため、世界国家イデオロギーに反したことを思考したとしても、最終的に市民の思考は世界国家の意図するところに帰結してしまう体制が整っているといえよう。ことわざによる統制は、言語情報の盲信、思考に用いる言語の硬直という観点から教育的に否定されるべきものであるといえそうである。

最後に、新聞紙による言語的統制について確認し、その教育的影響について考察を行う。作中では、ロンドンの三大紙としてアルファ階級が購読するアワリー・レイディオ紙、ガンマ階級向けのガンマ・ガゼット紙、デルタ階級向けのデルタ・ミラー紙が刊行されている。それぞれ階級のイメージカラーの紙に印字されている等の特徴が見られるが、ここで着目したいのは印刷された文章中の単語の音節である。作品本文にはデルタ・ミラー紙についてのみ、「一音節の単語のみを使用する「デルタミラー」紙」(p.76)と説明がなされている。アワリー・レイディオ紙、ガンマ・ガゼット紙における音節についての言及はないが、作中に、アルファ階級、ベータ階級の上層階級のみを受け入れる、イートン校をはじめとするエリート育成のための上級学校が存在することから、上層階級とガンマ階級の間にも識字力に差があると推察され、したがって三大紙は階級ごとにそれぞれ音節や語彙、文章の複雑さが異なるものと考えられる。加えて、主な登場人物の一人であり、上司から「少々有能すぎる」(p.77)と称される、アルファ・プラス階級のヘルムホルツがアワリー・レイディオに寄稿していることから、三大紙間で内容的にも差が見られる可能性が伺える。

このように主張した上で、新聞紙を用いた言語的統制に関して教育的分析を行う。心理学者の Snowling (1981)は、音節数と子音連結数が読解に与える影響についての自身の研究で、音節数と子音連結の数は失読症のグループには影響を与えたが、健常者グループにとっては読解において、あまり重要ではなかったという結果を示している。このことから、単音節単語のみで綴られたデルタミラー紙を購読するデルタ階級が、失読症を患っていることが推察できる。もしこのことが事実であれば、条件付けの際に一樣に、意図的に失読症にさせられた可能性が高いといえるだろう。そして、病症のレベルでないにせよ、彼らデルタ階級はデルタミラー紙による言語統制によって生涯一音節の単語によって構成された文章しか識字が不可能であるため、読解力の向上も認められない。現実世界では読解力や表現力、語彙力の向上に用いられることもある新聞紙が、かえって市民の、特にデルタ階級の識字能力を制限していることがここに伺える。

本節では、『すばらしい新世界』における言語を用いた統制の重要性とその効果、そして言語的統制の中から、ことわざと新聞紙の二つによる統制に着目して分析を行った。その結

果、重要性と効果に関しては、ハクスリーのディストピア描写に伺える言語統制への依存から作中の統制において最も重要な位置付けであることが考えられ、効果については、政治的統制と道徳的統制の連続性をもつ二つの効果が推察されると論じた。また、ことわざによる統制は言語情報の盲信、思考に用いる言語の硬直の二点から教育的に悪影響を及ぼすものであり、新聞紙による統制は下位階級の識字能力の制限に加担するものであると理解することができた。

本章では、『すばらしい新世界』に登場する教育的アプローチの分析や諸制度に垣間見える教育的要素の分析を行ってきた。はじめに、作中の代表的な教育アプローチである睡眠教育と条件反射教育を取り上げ、普遍的な教育理念について分析し、画一的成長と生活と教育の過度な緊密性といったディストピア的な理念を明らかにした。次に、個性の抑圧に関する制度が市民に与える教育的影響として、自己成長に必要な要素の排除と向上心の除去が挙げられると論じた。最後に、作中で行われる言語的統制の教育的悪影響に言語情報の盲信や思考に用いる言語の硬直、識字能力の制限といったものが認められることを示した。

第3章 現代日本における英語教育の問題点

本章では、第1章で論じた日本の英語教育の現状と、第2章で分析した『すばらしい新世界』にみられるディストピア的教育理念や教育的要素との比較を行う。この比較を行うことで、現代日本の英語教育の捉え方とディストピア社会の教育に対する考え方との類似性を明らかにし、最終的に今日の英語教育が孕む問題点を提示する。はじめに、カリキュラムや教育理念と作中のディストピア的教育手法や教育理念とを比較する。次に、個別最適な学びの現状と、個性の抑圧に関する教育的要素とを照らし合わせ分析する。最後に、英語科における現在の教科書使用に見られる抑圧の影響と、作中の言語統制に見られる教育的要素とを比較する。

第1節 教育理念、カリキュラムにおける問題点

本節では、第1章第1節で確認した現状の日本の英語教育のカリキュラムや教育理念と、第2章第1節で論じた『すばらしい新世界』作中に描かれているディストピア的な教育手法や教育理念とを比較する。また比較した結果をもとに、英語教育が孕み得る問題性について検討する。

まず、日本の英語教育と、作中の教育理念、教育手段との相違点について論じる。両者の相違点として、学習者の人間性の向上が念頭に置かれているか、そうでないかが挙げられるだろう。第1章第1節で示したように、『中学校学習指導要領』（2017b）では学習の三つの柱に、1) 知識及び技能、2) 思考力、判断力、表現力等、そして3) 学びに向かう力、人間性が掲げられている。これら三つの資質が実際に育成されているかについては本稿では追究しない。しかし、生徒が授業から得るべき能力として、学びに向かう力、人間性が三つの柱のうちの一つとして据えられていることは事実である。この事実から、教育者たちは生徒の学習意欲や向上心、人間性の育成を、少なくとも意識はした上で、指導にあたっているとみなすことができるだろう。

一方で、第2章第1節では、『すばらしい新世界』での睡眠教育と条件反射教育から伺える教育理念として、一様に社会の歯車として働く理想的な人間の育成が推察できるとした。子供を未来の労働力としてしか捉えていない作中の教育において、人間性が考慮されているとは到底いえないだろう。また、睡眠教育では道德教育が行われることについても第2章第1節にて指摘した。しかし、道德教育とはいうものの、実際は階級意識の刷り込みや、性愛、消費に関する価値観の押し付けに過ぎない。本来の道德教育で培われるべき市民の人となりや生得的な性質といった人間性が、作中の道德教育によって育まれることはないだろう。

先に示したように、今日の日本の英語教育が現実には子供たちの人間性を育成しているのかについては、本稿では検討しない。しかしながら、そもそも人間的な成長を視野に入れていなければ、前段落で指摘したように、人々の人間性が育まれることはまずない。そしてそ

の社会の行く末は、機械的に生み出された市民たちが、労働のための技能や耐性を遺伝子や教育によって詰め込まれ、一生涯社会の安定のために働き続けるディストピア社会である。したがって、学びに向かう力、人間性といった資質は、教育上、念頭に置くことそれ自体に意義があるといえよう。

実際に筆者は、英語教育の現場で人間性の育成を念頭に置いた指導を目撃している。筆者は、2024年5月に教育実習のため栃木県鹿沼市の公立中学校を訪れた。ALTが参加する授業において、ある対象物について一人が英語で説明し、もう一人がそれが何かを解答するというアクティビティが行われていた。外国人教諭は活動を開始する前に、対象物を英語で説明するときには、自分がその対象物についてどのように思うか、どのように感じるかを必ず伝えるように指導していた。彼はその理由として、生徒が対象物に対して抱いた、好きや嫌いといった感情は、紛れもなくその生徒自身のものであり、その感情を学習言語である英語を用いて表現させることにとても意義があるからであると説明してくれた。生徒自身のリアルな感情を再確認させることは、生徒が、自分が何に対してどのように感じる人間なのかを再確認させることであるといえる。したがってこの指導は、生徒が自分自身についてより理解し、人間的な成長を果たすことを念頭に置いた指導であるといえる。彼のような指導が英語教育全体で行われているとは断言できない。しかし、人間性を尊重した指導が今日行われており、人間性の観点からはディストピア的な教育を回避していることの裏付けになり得るであろう。

次に、日本の英語教育と、作品内で示唆されている教育理念、教育手段に共通し得る要素について論じる。第1章第1節では、中学校外国語科においては、原則として英語を学習言語として扱うとされていることを確認した。加えて、英語以外の外国語を学習言語に採択する高等学校の数を示し、この数値が2018年度から2021年度にかけて減少傾向にあることから、「外国語＝英語」というステレオタイプの広まりを推察した。そこで、子供たちが外国語科において英語学習へと誘導されてしまっている現状は、『すばらしい新世界』の世界国家によって敷かれた管理主義的な体制と類似し得るかどうかを検証する。

外国語科において英語を積極的に履修させる理由として、『中学校学習指導要領』(2017b)には、英語が世界中でコミュニケーションに使用されていることと、過去にほとんどの学校が英語を扱ってきたことの二点が挙げられている。英語話者の人口が英語を採択する理由に上がることは納得できるものの、過去に多くの学校で扱ってきたからという理由については、時代の流れに沿った意見であるとはいえないだろう。仮に、今後もし英語から他言語へと転換する際には、かえってこの過去の経験に基づく理由がネックとなり、スムーズなシフト変換が困難になると考えられる。

逆に、英語以外の外国語を採択しない理由として考えられそうなのが、高等学校外国語科や大学入試とのつながりである。しかしながら、大学入試共通テストでは令和5年度実施時点で、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語が試験科目として設けられており、これら

外国語以外の言語による受験を認めている大学も少なくない。このことから、高等教育や大学受験との接続は、英語を外国語科の学習言語に統制する理由として当てはまらないと考えられよう。外国語科において英語の学習へと生徒たちを誘導する理由として、英語話者の人口が大きいことの他には明確な根拠が挙げられていないことが以上二段落の検討から明らかになったといえるだろう。それにもかかわらず『中学校学習指導要領』では、多言語の学習を一部認めながらも、「原則」という強制力の強い言葉で英語の採択が強調されている。このことから上位下達的な英語学習への誘導が示唆され、他言語学習の機会を失わせてしまっていることから、生徒が受ける英語教育が管理主義的な影響を受けているといえるのではないだろうか。

また、「外国語＝英語」というステレオタイプの広まりによる悪影響は、単に人々の多言語への理解の不足だけには止まらないだろう。外国語を適切に運用するためには、その言語が話されている国々の文化等、背景情報が重要な知識となる。つまり、言語学習には文化や伝統といった背景知識の吸収が伴うといえる。したがって、学習することのできる言語が限定されてしまうと、生徒たちが得ることのできる国際的な知識も限られたものになってしまうと考えられよう。有用性のみから学習言語を原則英語とすることで、生徒たちが逃している国際理解の機会についても今後検討する必要があるだろう。

本節では、現状の日本の英語教育のカリキュラムや教育理念と、『すばらしい新世界』に登場する教育理念や教育手法との比較を行った。その結果、作中にみられる教育理念とは異なり、日本の英語教育の教育理念には人間性を尊重した教育手法が取り入れられていることを理解した。しかしながら、カリキュラムにおける日本の英語教育が孕み得る問題性について、学習言語を原則的に英語に縛ることが管理主義的な性格を持ち得る行為であり、問題性が示唆されることを指摘した。

第2節 成長のための個別最適化

本節では、日本の英語教育における個別最適な学びの現状と、第2章第2節で教育的な観点から分析を行った個性の抑圧に関する『すばらしい新世界』作中の諸制度とを比較する。そして、今日の日本の英語教育で目指されている個別最適な学びが、問題性を秘めているのかどうかについて考察する。

まず、個別最適な学びによって得ようとしている生きる力と、『すばらしい新世界』に登場する階級制度とを関連付け、個性化教育に関する問題点について論じる。生きる力とは自分が理解し、実行できることをどのように活かすのか、またどのように社会や世界と関わり人生をより良いものにするのかを指す能力である。また杉山（1998）は、この生きる力を養成するにあたって、子供たちそれぞれの学習と生活との関連付けが必要であるとし、個性化教育の必要性を主張していると第1章第2節で示した。また第2章第2節では、『すばらしい新世界』の階級制度が人々に与える教育的な影響として他階級との絶対的な格差が、さ

らに上位の階級への市民の向上心を阻害することで、日常的な学習意欲の抑圧をも引き起こしていることを理解した。

『すばらしい新世界』の階級制度は、人々の日常的な学習意欲をはじめとした、普遍的な向上心を阻害する。一方で、生きる力は生活の中での学びなしでは獲得することのできない能力である。この二つのことから、『すばらしい新世界』の階級制度のように、人間をあるステータスで振り分け、特定の階級にとどめてしまう操作は、最終的には学習意欲等の向上心を抑圧してしまうことになるため、生きる力の養成を妨害する操作であるといえるであろう。

ここで、前段落での主張を軸に、今日英語科指導において広く行われていると見受けられる、習熟度別クラスの作成について分析する。英語科の習熟度別クラスの編成では、テストの点数等の指標をもとに生徒たちがそれぞれの習熟度ごとに振り分けられる。そして英語科の授業時間のみ、割り当てられたクラスへと移動し、自分と近い習熟度の他生徒と一緒に授業を受ける。指導生徒の成績にばらつきがないため比較的指導しやすいクラス構成であることから、教員にとっても指導の効率化の点で有用であるだけでなく、生徒にとっても授業内容が高度すぎる、あるいは低度すぎるといったことがなく、自分の理解度に沿った授業を受けることができる点で効果的である。後者の、生徒が自分で理解できるレベルの授業を受けることができるという利点は、個別最適な学びを構成する指導の個別化と学習の個性化のうち、習熟度に見合った教材や学習時間の提供を指す学習の個性化に該当する。したがって子供たちの個別最適な学びを促進しうる要素の一つであるといえるであろう。しかしながら、人文学者の西出（2019）が指摘するように、学校によっては外部試験のリスニング、リーディング合計得点のみをクラス編成時の指標として参照しており、技能別の習熟度が考慮されていない場合がある。西出の主張に基づくと、習熟度別クラス編成はあくまでもおまかな英語の「出来」のみを考慮したものであり、実際に生徒が個別化された授業であると感じるか否かは鑑みられていないように伺え、未だ課題を孕んだアプローチであるといえよう。

さらに、似通った英語運用能力を持った子供たちだけで一つのクラスを編成するということは、必然的に他レベルの、特に上位レベルの英語運用能力を持った生徒との授業内での交流が削減されることとなる。このことによって、より英語を上手に運用することのできる生徒への競争心や尊敬といった動機に基づく、英語学習に対する向上心も生まれにくくなっているのではないだろうか。そしてさらに、英語を学ぶことに対する向上心の抑圧は、個人で英語を学ぶ、あるいは日常的に映画や書籍等を用いて英語に触れるといった、生活の中での学びを減少させる要素となりうるであろう。以上のように分析すると、一方では個別最適な学びを促進しているとみなすことのできる習熟度別クラスの編成が、もう一方では情意面で子供たちの個別最適な学びへの姿勢を阻害してしまっている可能性がある。

次に、嵐谷ら（2022）が行った中学校英語科の授業内における足場的支援の実践と、ボカ

ノフスキー法が作中の人々に与える教育的な影響とを関連付けて考察を行う。嵐谷らは、授業中に生徒が難問に直面したとき、用意されたオプションの中から生徒自身に解決方法を選択させ解決させるという足場的支援の実践を行った。この実践は、生徒が自己判断で自身の学びを設計することができる、柔軟性をもった実践であると第1章第2節で分析した。さらにまた、足場的支援を行う利点として、生徒たちが自身の弱点に対し葛藤、自己判断を行うことによる自己理解、自己成長の促進が挙げられる。生徒たちは自分一人では答えの出せない問いに対して足場的支援を活用する。生徒たちがオプションの中から選択するまでの間には、彼らの中で一度自分のできないことと向き合い、それを理解するということが行われていると思われる。これは、教員からの一方向的な指導ではなく、生徒自身が問題解決について探究する足場的支援であるからこそ行われる、いわば自身の弱点に対する葛藤であるとみなすことができるであろう。そして、生徒たちは葛藤の中で自分ができないことについて理解を深め、それを克服しようとすることで自己成長が促進されているといえる。一方、『すばらしい新世界』では、ボカノフスキー法をはじめとする制度によって、極限まで市民の抱える葛藤やストレスが削減されることで、彼らの内省が抑圧され、自己成長が阻害されていると第2章第2節で示した。このボカノフスキー法が市民に与える教育的影響を嵐谷らの足場的支援実践の効果と比較すると、足場的支援の設置は人間が本来煩わしいと感じる葛藤を上手く活用し、自己成長へと繋げている点で、作中にて行われている葛藤やストレスの排除とは逆の立場をとっているといえる。したがって、子供たちの内省を促し、それを活用した実践である点で、嵐谷らが実践した学習の個性化のための足場的支援は、作中の社会のような葛藤を根本的に排除する姿勢からは遠い位置関係にあるといえるであろう。

本節では、英語科での個別最適な学びの現状と、『すばらしい新世界』の個性の抑圧に関連する諸制度に起因しうる教育的影響との比較を行った。結果として、英語科における習熟度別クラスの編成は学習の個性化を促進しうる実践であるものの、異なる習熟度の生徒との交流の減少から、作中の階級制度のようにより上位の習熟度への競争心や憧れに基づく向上心が削がれてしまい、日常的に英語を学ぶ意欲が低下してしまう可能性を示した。また、嵐谷らの足場的支援実践に関しては、ボカノフスキー法に見られる作中の葛藤やストレスに対する立場とは逆に、子供たちの葛藤を上手く活用し彼らの自己成長に繋げうる点で評価できる実践であると論じた。

第3節 教材に関する批判検討

本節では、前章にて分析した『すばらしい新世界』における言語を用いた統制の具体的な分析結果と、日本の英語教育における教科書の使用状況とを比較する。そして、現代の英語教育が抱える教科書の使用に関する問題について、国際理解とカリキュラムの二つの観点から考察する。

まず、外国語科の教科書の内容に見受けられる国際的観点欠如の問題性について、新たに

『すばらしい新世界』での言語統制に関する分析結果を踏まえ検討する。第 1 章第 3 節では、現在日本の英語教育現場で使用されている教科書には、戦争等の国際的事象に関して、外国人の価値観に基づく記載はなく、国際理解をも目標に据える科目でありながら、国際事件に対し一面的な解釈を扱っている点に問題があると論じた。教育学者の植木 (2013) は、日本の学校教育における国際感覚育成について、「少々の知識・体験を得たことをもって、他者が理解でき、差別意識が消え去ったような良い気分が漂うということとはなかっただろうか」(p.200) と指摘した上で、そのような国際理解教育を受けた生徒たちが「相手を見ずして他者理解ができたとの誤解を学習することにもなる」(p.200) と論じている。まさに、現代の日本の英語教育における国際事件の扱い方は、日本人の観点からの解釈を理解することをもって、平和について学んだと謳っているようなものではないだろうか。もちろん、そのような内容に触れることはきっかけとして重要ではあるものの、断片的な理解は植木が主張するように、単なる「誤解」になりかねないであろう。

外国語科はその名の通り主に言語を学ぶ教科である。言語は、第 2 章第 3 節にて示した通りそれ自体がイデオロギーを反映しやすく、また使用されることで共通観念が構築されることもある。つまり言語は、話者の考え方や思想と強いつながりを持つ存在であるといえよう。この言語と共通観念との強いつながりを考慮すると、言語を学ぶ外国語科は、言語の習得を目標としない他教科に比べ、生徒たちの考え方や思想に影響を与えやすい教科なのではないだろうか。ひいては、外国語科にて扱う教科書の内容に関しても、より生徒の思考や価値観に影響を与えるものと推察される。そのような、生徒たちの価値基準に影響を及ぼしうる教科でありながら、また国際理解を促す教科でありながら、国際的事象に対し日本人としての捉え方のみを扱ってしまえば、生徒たちをよりリアルな海外の価値観から遠ざけてしまうであろう。以上のことから、日本の外国語科の教科書には、国際理解の一環として、国際的な事象に対し海外の人々がどのような価値観を持っているのかについて記載がされるべきであろう。

しかしながら戦争等の国際事件を理解する上で、日本人としてのアイデンティティも無視することはできない。原子爆弾等の内容に関しては、世界唯一の被爆国である日本であるからこそ、譲ってはいけない立場や価値観があることも事実である。したがって、海外の価値観に基づく記載については、あくまでそのように考えられているという事実の紹介にとどまるべきである。その上で、日本人である我々がどのような立場や価値観をとるべきかは、生徒たちの批判的思考に基づいて判断されるべきである。ここで教員には、生徒の倫理的な判断を促すべく補助に徹することが求められるであろう。

次に、文法的事項に見受けられる学年枠の問題性について、作中のことわざを用いた言語統制に関する分析内容を考慮しながら考察する。第 1 章第 3 節では、低学年から高学年に上がるにつれて、より高度な文法事項を学習するように設定されている学年枠が、すでに撤廃された規定である言語材料の名残である可能性を示した。また、学年枠は今日の英語学習

に適したものではないとも考えられ、問題点の一つとして捉えられると主張した。

この学年枠による学習文法の制限は、『すばらしい新世界』におけることわざを用いた言語的統制と共通する要素を持ちうると考えられる。作中の市民たちは睡眠教育によって数々のことわざを刷り込まれ、ここから得る言語的知識も多い。したがって、彼らが思考する際に用いる言語もことわざ等の言語的統制の影響を多く受けているものと思われる。このことから、市民の使用言語のみならず、彼らの思考もまた言語を用いた統制によって管理されうると示される。ここで、学年枠も似たように、文法事項を制限することで学習者の思考を制限している可能性がうかがわれる。実際に、単純に難易度順に文法事項が配置されているとすれば、学習者の英語による思考も徐々に高度な内容に慣れていくことになる。

しかしながら、対話的な内容が重視される現代の英語教育では、便宜上、学年枠を設置するとしても、コミュニケーションにおける必要性や実用性を加味する必要があるのではないだろうか。これにより、学習者の用いるメタ言語も、会話において有効なものから充実されてゆき、最終的にはコミュニケーションに強い思考力を養うことにつながるであろう。コミュニケーション活動への参加の無理強い、英語学習が苦手な生徒をさらに遠ざけることになりかねないが、コミュニケーションに重点を置いた新しい英語学習を達成するためには、2000 年以前からの名残とみなせる学年枠に対し、大きな変革を起こす必要がある。

本節では、『すばらしい新世界』に登場する言語的統制についての分析内容を踏まえ、日本の英語教科書がはらみうる問題について検討した。その結果、国際理解の観点からは世界的事件に対する海外の人々の価値観を反映した記載内容の不足を問題点として指摘した。また、カリキュラム上の問題として、1950 年代以来の文法に関する規定が、コミュニケーション重視の英語教育を妨げていることが挙げられた。

本章では、『すばらしい新世界』に登場する教育や諸制度についての分析を踏まえながら、日本の英語教育が抱える問題点についての考察を行った。まず、日本の英語教育のカリキュラムや教育理念を作中の管理主義的な教育理念と対比させ、現在の外国語科のカリキュラムが一部管理主義的な性格を秘めていることを指摘した。次に、個別最適な学びを作中に登場する個性の抑圧に関する諸制度と比較し、学習の個性化を図るための実践にも情意面で問題を孕んでいる可能性を示した。そして、言語を用いた統制の分析内容を考慮しながら英語教科書が抱える問題点を考察し、国際理解とカリキュラムの二点から、国際事件に関する局所的観点からの記載と、学年枠の影響を受けた文法事項の記載を問題点として提示した。

終章

今日の日本の英語教育は、国際化やそれに伴う英語運用能力の要求の高まりによって、開始学年や授業中の指導方法といった点に変容が見られる。しかし、B1 レベル相当以上の高校生が減少したことが「英語教育実施状況調査」から読み取れ、日本の英語教育が十分に適切かつ効果的にはたらいっているとは言い難い。そこで本論では、現代の英語教育の改善を主題とし、英語教育の問題点を提示することを目的とした。研究方法は、政府の刊行物や先行研究を用いた日本の英語教育の分析と、ディストピア文学の一つである、小説『すばらしい新世界』の教育的観点からの分析、またそれら二つの分析結果の比較検討である。

第 1 章では、今日の日本の英語教育について分析を行った。まずカリキュラムや教育理念に着目し日本の英語教育の分析を行い、「外国語＝英語」というステレオタイプが生成される可能性や、小学校、中学校間に見られる学習内容の差が生徒に与える負担、そして外国語科での生徒の情意面養成の重要性とその限界について指摘した。次に、個別最適な学びの達成度合いについて、特に学習の個性化の観点から考察し、子どもたちの向き不向き、好みに応じた学習方略の整備については個別最適化が推し進められているものの、子どもたちそれぞれのキャリア形成や人間性の育成といった観点では未だ個性化が不十分であり、学習と生活との一層の関連付けが必要であると論じた。そして、教科書の使用方法及び記載内容について確認し、教科書がどのように活用され生徒がどのような情報を受け取るかが教員に委ねられていることを示した上で、記載文法事項が前時代的な言語材料の影響を受けている可能性と、戦争に関連する内容について、日本人目線のための局所的観点から記載されている問題性を明らかにした。

第 2 章では、『すばらしい新世界』を教育的観点から分析した。はじめに作中に描かれている睡眠教育や条件反射教育といった教育方法をもとに、そこに敷かれた教育理念について考察し、世界国家が望ましいとする人間への画一的な育成と、教育が日常生活に過度に関連づけられることによる強大な影響力の二点が教育理念として推察された。また作中の個性の抑圧に関する諸制度を教育的観点から分析し、人々の自己成長の妨害や日常的な上昇志向、学習意欲醸成の阻害といった影響が考えられることを示した。そして、言語を用いた統制について、人々に及ぼされる教育的な影響を検討し、ことわざの使用については言語情報に対する過度な信頼の促進やメタ言語の統制の二点を、刊行される新聞紙については、下位階級の識字能力の抑圧を悪影響として挙げた。

第 3 章では、現代の英語教育の分析内容と『すばらしい新世界』の分析内容とを比較し、新たに英語教育の問題点について考察した。第一にカリキュラムと教育理念の観点で日本の英語教育と本作品の分析結果を比較し、「外国語＝英語」のイメージを推し進めている点に管理主義的性格が垣間見え問題であると論じた一方で、教育理念については本作品と異なり人間主義的な考えのもと構築されており、評価できるものであるとした。続けて、個別最適な学びと作中の個性の抑圧に関する諸制度とを比較し、習熟度別クラスにおいて上昇

志向の抑圧と学習意欲の停滞が示唆され、問題点の一つであると論じた。そして、足場的支援実践は生徒たちが学習において抱える葛藤をポジティブに活用し彼らの自己成長に繋げることができる、十分に個別最適化されたアプローチであると判断した。最後に、言語的統制の教育的分析を踏まえて日本の英語教育における教科書使用に関する問題点について検討し、第 1 章で論じた国際事件に対する日本人目線のみからの記載、また言語材料からの影響が示唆される文法的学年枠が、生徒のコミュニケーションベースの思考力養成を阻害している点を問題として示した。

以上のように、本稿では日本の英語教育の現状と、ディストピア作品『すばらしい新世界』を教育的に分析した結果とを比較し、日本の英語教育が抱える問題点を検討してきた。結論として、まず外国語科と称しながら英語学習を原則とすることが、「外国語＝英語」という偏った解釈を子どもたちに植え付けかねない点で問題であるといえる。また、現在広く採用されている習熟度別クラスの編成は、一部個性化を促進させる作用が認められている一方で、より上位の生徒との交流が期待できず、憧れや競争心のきっかけが阻害されている点で問題性があることが指摘できる。さらに教科書の記載内容について、国際理解を促す教科でありながら国際的事件についての記述が日本人目線のものであることと、学年枠による文法事項の配置が生徒の英語コミュニケーションに適した思考力の育成を阻害していることが問題点として提示できる。本研究の意義として、文学作品に登場する教育的要素と、現実世界の教育とを比較し問題点を指摘するというフィクションとノンフィクションを融合するようなアプローチを開拓し研究を行ったことが挙げられる。

参考文献

- Fu, L. (2023). Language Control in Aldous Huxley's *Brave New World*. *Studies in Linguistics and Literature*, 7, 187-199.
- Huxley, A. L. (2002). *Brave New World*. Philosophy Learning and Teaching Organization. Retrieved November 29, 2024, from <https://www.plato-philosophy.org/wp-content/uploads/2016/05/BraveNewWorld-1.pdf>
- Kuang, H. (2022). Deconstructing Utopia: Discussion of the Theme of *Brave New World*. *Frontiers in Art Research*, 4, 54-65.
- Martín, G. A. R. (2019). Proverb Modification in Aldous Huxley's *Brave New World*. *Paremia*, 29, 235-246.
- Simpson, P. (1993). *Language, Ideology and Point of View*. London, Routledge.
- Snowling, M. J. (1981). Phonemic Deficits in Developmental Dyslexia. *Psychological Research*, 43, 219-234.
- 嵐谷恭子・川谷のり子・鎌田真由美・三成拓亜・大谷みどり・猫田英伸（2022）「中学校英語科における学びの多様性に応じた個別最適な授業づくり」『中国地区英語教育学会誌』52, 39-51.
- 植木節子（2013）「“国際理解教育”の影響と国際感覚育成に関する考察」『千葉大学教育学部研究紀要』61, 193-201.
- 太田和敬（2016）「未来の教育に関する考察（Ⅰ）」『人間科学研究』38, 文教大学人間科学部, 47-78.
- 加賀田哲也（2009）「人間学的英語教育の概念構築への一考察」『大阪商業大学論集』5, 467-479.
- 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘（2022）『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法』, 大修館書店.
- 杉山浩之（1998）「個性化教育の研究：その必要性和考え方」『広島文教女子大学紀要』33, 119-128.
- 中央教育審議会（2021）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』, https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（最終閲覧日：2024年11月29日）
- 渡慶次正則（2023）「文法的特徴、言語知識と言語処理から検討する小学校と中学校の英文法指導の接続」『環太平洋地域文化研究』4, 名桜大学環太平洋地域文化研究所, 79-90.
- 西出崇（2019）「外国語科目における習熟度別クラス編成方法の課題と改善—技能別習熟度を考慮したクラス編成の提案—」『大学情報・機関調査研究集会論文集』8, 大学情

- 報・機関調査研究集会, 44-49.
- ハクスリー, オルダス (2014) 『すばらしい新世界』黒原敏行訳, 光文社電子書店.
- . (1986) 『ハクスリーの教育論』横山貞子訳, 人文書院.
- 馬場哲生 (2009) 「中学校英語検定教科書における文法項目の配列順序」『東京学芸大学紀要人文社会科学系 I』60, 209-220.
- 文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語活動・外国語編』, https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kyoiku02-100002607_11.pdf (最終閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- . (2017b) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語編』, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf (最終閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- . (2021) 「令和 3 年度高等学校等における国際交流等の状況について」, https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/20230403-mxt_kouhou02-1.pdf (最終閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)
- . (2024) 「令和 5 年度『英語教育実施状況調査』概要」, https://www.mext.go.jp/content/20240527-mxt_kyoiku01-000035833_1.pdf (最終閲覧日: 2024 年 11 月 29 日)